

事務局： ただ今から令和6年度広島県公開アドバイザーボードを開催いたします。

私は、広島県教育委員会乳幼児教育支援センターの尾下と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会前にもアナウンスをさせていただきましたが、オンライン開催に当たりまして、諸連絡を2点お伝えいたします。

1点目です。本会議は、記録のため主催者側で録音をさせていただいておりますので、あらかじめ御了承ください。参加者の皆様による録画・録音、スクリーンショット等はお控えいただくようお願いいたします。

2点目です。開会中、参加申込みをされた皆様におかれましては、マイクを必ずミュートにさせていただくようお願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、広島県教育委員会 篠田 智志教育長から御挨拶申し上げます。

篠田教育長： 皆様、こんにちは。広島県教育委員会教育長の篠田でございます。

本日は、令和6年度広島県公開アドバイザーボードに御参加いただきまして、誠にありがとうございます。

このたび、初めて公開という形で開催しましたところ、市町の行政担当者や幼稚園・保育所・認定こども園等の関係者だけでなく、文部科学省や他県の乳幼児教育支援センターなど、県外からも幅広く御参加いただいております、厚く御礼申し上げます。こうやって多くの方に本県の取組を知っていただく機会となることを大変うれしく思っております。

また、本センターが設置されました平成30年から御指導いただいているアドバイザーボードの先生方、関係団体の長の皆様方におかれましては、平素から本県における乳幼児教育・保育の充実に向けて、御理解と御協力をいただいておりますことに改めて感謝を申し上げます。

さて、広島県では、「教育に関する大綱」において七つの施策を示しておりますが、その一番最初に「乳幼児期における質の高い教育・保育の推進」を掲げております。乳幼児期は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であり、乳幼児期における教育・保育は、その後の学校教育における生活や学習の基盤となる重要な役割を担うものであることを踏まえて、各種の施策を推進しているところでございます。

具体的には、「遊びは学び」という乳幼児期の教育・保育の基本的な考え方の下、各種研修の開催や幼児教育アドバイザーによる園・所の訪問、幼保小連携・接続のための体制整備の支援や人材育成、また、家庭教育支援の充実に向けた情報発信や保護者の学びの機会の提供などに取り組んでおります。こうした施策の推進に当たりましては、アドバイザーボードの皆様から、様々な機会に評価や御意見をいただきながら充実を図っているところでございます。

本日は、約1,000か所ある広島県内の園・所等における教育・保育の質を更に向上させていくための方策と、子育て中の御家庭をはじめ、県民の皆様から「遊びは学び」の考え方をより広く知っていただくための方策の2点について協議をさせていただくこととしております。

各委員の先生方におかれましては、専門的・実践的なお立場から忌憚のない御意見をいただきますようお願いいたします。また、御視聴いただいております皆様におかれましては、この意見交換の内容が、日々の教育・保育の現場でのお取組の参考になれば幸いです。

本日のアドバイザーボードを通じまして、本県の乳幼児期における教育・保育の取組が一層充実することを祈念申し上げ、開会の御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

事務局： 本日は、湯崎英彦知事にも参加いただいております。それでは、湯崎知事、御挨拶をお願いいたします。

湯崎知事： 皆様、こんにちは。広島県知事の湯崎でございます。

まずは、アドバイザーボードの皆様、本日は大変御多用中にもかかわらず、御参加をいただきましてありがとうございます。また、今日は公開ということで、100人近い外部の方が御参加をいただいているということで、本当にうれしく思います。皆様も大変お忙しいことと思いますけれども、御参加を賜りまして心から感謝を申し上げたいと思います。

さて、本県では、総合計画であります「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」において、「教育」の領域では、「遊びは学び」という乳幼児期の教育・保育の基本的な考え方が、幼稚園・保育所・認定こども園などで共通認識され、子供たちがやりたいことを自由に選択できるような環境の中で、生涯にわたって主体的に学び続けるための基盤づくりを進めているところでございます。

また、「子供・子育て」の領域では、全ての家庭を、妊娠期から子育て期まで切れ目なく見守り支援するネウボラの設置を進めておりまして、子供と子育て家庭が安心して暮らし、子育てができる取組を推進をしているところでございます。

この背景を申し上げますと、大学改革について国で議論されている中で、地方としては、大学だけでは変わらないだろうと、大学が変わるためには高校が変わらなければいけない、高校が変わるためには中学校が変わらなければいけない、中学校が変わるためには小学校が変わらなきゃいけないし、小学校が変わるためには乳幼児期から、極端に言えば生まれる前から、これはネウボラとも関わってきますけれども、変わらなければいけないということで、本日御参加のアドバイザー等々の先生方の御意見もいただきながら検討を進めてきた結果、乳幼児期の教育・保育が極めて重要であると、人生の中でのコースを規定づけるような最も重要なものであるという認識に至りまして、今この取組を進めているところでございます。

現在、「ひろしまビジョン」の分野別計画であります「ひろしま子供の未来応援プラン」の改定も進めているところであり、次期計画においては、「ひろしま子供の未来みんな応援プラン」と名称も変更しまして、さらに子供・子育て施策を推進することにしております。

この新しいプランでは、「すべての子供たちが、成育環境の違いに関わらず、健やかに夢を育むことのできる社会の実現」を目指しまして、生涯にわたる人格形成の基礎を培う時期である「乳幼児期の取組」については、特に注力する分野と位置づけているところでございます。

先ほど申し上げましたように、この乳幼児期の教育・保育に力を入れているのは、皆さんも御承知のとおり、ジェームズ・ヘックマン、ノーベル経済学賞を受賞されていますけれども、その研究にもございますし、今や関係者の共通認識だと思っておりますけれども、子供たち一人一人にとって就学前の大人の関わりが非常に重要だと考えているからでございます。

本県のこれまでの取組の意義を振り返りますとともに、今後注力していくべきことについて、アドバイザーボードの皆様から、忌憚のない御意見をいただければ大変幸いです。ここでの議論を契機として、社会の希望であります子供たちの未来に関する施策を、オール広島県でさらに強力に推進してまいりたいと考えておりますので、

本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

事務局： 続きまして、御出席いただいておりますアドバイザーボード委員の皆様を御紹介いたします。なお、紹介順は五十音順とさせていただきます。

広島大学名誉教授、朝倉 淳 先生です。

朝倉委員： こんにちは、よろしくお願ひします。

事務局： 続きまして、慶應義塾大学教授、今井 むつみ 先生です。

今井委員： 今井でございます。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

事務局： 続きまして、IPU・環太平洋大学教授、内田 伸子 先生です。

内田委員： 内田でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

事務局： 続きまして、広島大学大学院教授、七木田 敦 先生です。

七木田委員： 七木田です。よろしくお願ひします。

事務局： 続きまして、安田女子短期大学教授、橋本 信子 先生です。

橋本委員： 橋本でございます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

事務局： 皆様、よろしくお願ひいたします。

なお、学習院大学教授、秋田 喜代美 先生におかれましては、本日は御欠席でございます。

また、白梅学園大学名誉教授、無藤 隆 先生におかれましては、後ほど御参加をいただく予定です。

その他の出席者につきましては、スライドに表示しております委員等名簿により、紹介に代えさせていただきます。

それでは、改めて本日の流れを確認いたします。先に取り組報告を15分、続いて90分の意見交換となります。それでは、取り組報告に移ります。

乳幼児教育支援センターの取組について、広島県教育委員会 乳幼児教育支援センターの京谷副センター長から説明いたします。

京谷副センター長： 皆様、こんにちは。乳幼児教育支援センターの京谷でございます。

アドバイザーボードの皆様におかれましては、これから説明させていただく内容を基に、スライドにお示ししております2点について、後ほど御意見を頂戴したいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず、子供主体の教育・保育を園・所等実践していただくために取り組んでおります、「育みシート」を活用した園・所等への支援等について報告いたします。

本日は、県外の方にも御視聴いただいておりますので、「「遊び 学び 育つひろしまっ子！」育みシート」、通称「育みシート」がどのようなものかについて、説明いたします。

「育みシート」とは、昨年2月に広島県教育委員会が作成した、生活や遊びの中で見られる子供の姿を記載したもので、ゼロ歳児から2歳児までの乳児版と3歳児から架け橋期までの幼児版で構成されています。シートを基に、見取った子供の姿の意味や背景を含めて考えるなど、子供理解を深めるとともに、遊びを通して学ぶ保育への手がかりを得ていただくためのツールです。

本年度は、「育みシート」の周知・普及に取り組んでいます。全園・所に「育みシート」等を郵送するとともに、作成意図や内容、活用に当たっての留意点について解説した動画を作成・公開しました。また、研修や会合等、様々な場所に赴いて広報を行うとともに、活用の体験を促しております。

また、「育みシート」を活用した研修を3種類展開しております。12月末時点で、県内の4割を超える園・所が、「育みシート」に関するいずれかの研修に参加しております。

スライドは、「育みシート」体験者の声をお示ししています。中でも一番下にありますとおり、出前研修で「育みシート」の活用を体験いただいた方からは、「育みシート」を活用して、他の園・所の保育者と交流すると、「子供の育ち」について自分では気づかなかった視点を獲得することができて勉強になった。」との声を複数いただいております。このように、「育みシート」を媒介にして、保育者が、経験年数を問わず、他の園・所等の保育者と子供の育ちについて語り合うということは、自らの保育観をさらに豊かにする機会の一つとなっているのではないかと考えております。

ここからは、「育みシート」の認知度や活用状況について、抽出した150園・所を対象に実施しましたアンケート調査の結果を御報告いたします。

まず、認知度についてです。約9割の園・所が「シートを知っている」と回答しました。

次に、活用状況についてです。約8割の園・所が「シートを活用したことがある」と回答しております。

「シートを活用したことがない」と回答した理由で、最も多かったのは、「シート以外の資料を参考にしている」でした。参考に、シート以外の資料は何かについて聴取いたしましたところ、「3要領・指針を参考にしている」という回答が最も多かったです。また、「市が独自に作成したカリキュラム、発達の見取り表」や「保育に関する雑誌」を参考にしているといった園・所もございました。

「シートを活用したことがある」と回答した園・所に、活用の具体について尋ねたところ、最も多かった回答は、「指導計画を作成する際の参考にしている」でした。次いで、「日誌や手帳に挟んで見ている」、「シートを活用して園・所内研修をしている」の回答が多く見られました。

スライドには、「シートを、子供の様子を保護者に伝える際の参考にしている」と回答した園・所のうち、2園・所の事例をお示ししております。

事例一つ目の広島市立長束幼稚園では、園長先生が、保護者に対して「育みシート」を用いて、子供の発達の姿は様々ではないこと、子供の思いを尊重して関わる大切であること、などを講話されたとのことでした。

事例二つ目の認定こども園焼山こぼとでは、「育みシート」の文言等も参考にしながら、担任が子供の育ちの記録を作成しておられます。また、保護者に対してシートを用いながら、今の子供の姿を基にしたかわりを、園はもちろん、家庭でもやっていくことが、生涯にわたって主体的に学び続けるための力となることを説明しておられるとのことでした。

この事例から、シートが、園・所等と家庭が一体となって子供の成長を支えることに寄与しているのではないかと考えております。

以上のとおり、子供主体の教育・保育を園・所等実践していただくため、「育みシート」を子供理解、保育改善のツールとして周知してまいりました。今後は、「育みシート」などのツールを活用しながら、自立的にPDCAサイクルを回し、保育の質を高めていける園・所等のさらなる増加に向けて、有効な支援をする必要があると捉えており

ます。

続きまして、「遊びは学び」を保護者を中心とした県民の皆様に届けるための取組について、報告いたします。

広島県では、乳幼児期の教育・保育の基本的な考え方として、「乳幼児にとって、遊びや日々の生活の全てが学びである」ということを「遊びは学び」と表現し、この考え方が、全ての教育の出発点である家庭・地域においても共通認識されるよう取り組んでおります。

「遊びは学び」をお伝えする方法として、本県では、啓発資料の作成やSNSによる発信など、様々な手段を講じているところです。今年度、子育て家庭にさらに広げるため開催しております「あそびのひろば」について、説明いたします。

「あそびのひろば」とは、身近な場所で、気軽に取り組むことができる遊びを親子で一緒に体験し、「遊びは学び」を保護者が体感的に理解する場です。開催場所は、イベントやショッピングセンターなど様々であり、決まった場所はございません。

スライドは、広島県主催の開催事例です。県の連携企業の協力より、商業施設を中心としております。大学生ボランティアや「あそびのひろば」ファシリテーターとともに、簡単な工作遊びや釣り遊び、絵本の読み聞かせなどを行いました。保護者には、着替えや食事など身近な例をもとに「遊びは学び」について解説したリーフレットを配付し、子供への関わり方の参考としてもらっております。

次に、市町主催の開催事例です。市町と連携し、市町主催の図書館でのイベントや、子育てイベントの中で「あそびのひろば」のコーナーを設けていただくなど、既存のイベントに併せて開催いただいております。

県内全域に広めるためには、このように市町主催の「あそびのひろば」を開催することが必要であると考えており、県では、人材育成の支援として、各地域で「あそびのひろば」を開催する際に中心となるファシリテーターを養成する研修を、令和4年度から実施するほか、スライドにあるような支援を市町の取組に対して行っております。

しかしながら、「あそびのひろば」に参加する家庭は限られており、より多くの子育て家庭に「遊びは学び」の考え方を届けるため、令和6年度からの新たな取組として、ネウボラ拠点と連携し、子育て家庭が一堂に会する3歳児健康診査で開催いたしました。本年度は、スライドにありますとおり、関係部署と連携し、健診の運営に支障を生じさせないことに配慮しながら、2会場で開催しております。

「あそびのひろば」は、本年度実施予定を含めて9か所、11回の開催となっております。今後は、保護者をはじめとした一人でも多くの県民に、「遊びは学び」の考え方を届けるために有効な手立てを講じていく必要があると捉えております。

以上が、乳幼児教育支援センターの取組の説明となります。ありがとうございました。

事務局：続きまして、「ネウボラ拠点での「あそびのひろば」～ネウボラでの受け止め～」について、広島県健康福祉局子供未来応援課 ネウボラ推進担当の清水課長から説明いたします。

清水担当課長（ネウボラ推進担当）：皆様、こんにちは。広島県健康福祉局子供未来応援課 担当課長の清水と申します。今日はよろしく願いいたします。

先ほどお話がございましたように、先日、ネウボラ拠点におきまして「あそびのひろば」が実施されましたので、その際のネウボラでの受け止めなどについて御報告をさせていただきます。

2ページをご覧ください。まずは、前提といたしまして、ネウボラ拠点とは何か、また、広島県では「ひろしまネウボラ」という取組を実施しておりますけれども、これが

どういものなのかについての御説明をさせていただきます。

「ひろしまネウボラ」とは、子育ての不安や負担を減らし、安心して妊娠・出産・子育てができるよう、ネウボラ拠点と地域の関係機関とが一体となって、妊婦や子育て家庭の不安や悩みに寄り添い、見守り、支援する仕組みとなっております。

御覧の右の図にありますように、市町が設置しておりますネウボラ拠点が中核にあります。ネウボラ拠点というのは、市町の施設や窓口でございまして、母子手帳を交付したり、乳幼児健診を行ったり、育児等の悩みがあれば適宜相談できたりするような場所です。これと地域の関係機関、今日も多く御参加いただいております、保育所・幼稚園・こども園などや、医療機関、地域の遊び場などがございすけれども、こうした地域にある子育て関連機関と子育て家庭を連携して見守りまして、これら関係機関からの情報がネウボラ拠点に届けられ、この拠点が子育て家庭への支援のコーディネートを行うという仕組みとなっております。

ネウボラの具体的な取組といたしましては、左側の表のとおり、主に三つのことを行っております。一つ目は「面談回数の追加・完全な全数把握」として、子育て家庭の状況を把握するために、妊娠期から3歳までの間に7回の面談を実施すること、また、把握に漏れがないよう、そのうちの5回につきましては、安全な全数把握として全ての家庭の状況把握を行うことなどを定めております。二つ目と三つ目の詳しい紹介は割愛させていただきますが、これらの取組の徹底を、広島県が市町の皆様をお願いをいたしまして、手厚く子育て家庭を見守っているのが「ひろしまネウボラ」でございます。

次のページをご覧ください。先ほどの取組の一つでございます「完全な全数把握」について、実施状況をまとめて表にしてみました。御覧の5回のタイミングにおきまして、真ん中に全数把握率とありますけれども、御家庭の状況をほぼ100%把握できているところでございます。

4ページをご覧ください。このように全ての家庭にアプローチできることが、ネウボラの強みと考えており、家庭教育への関心の有無にかかわらず、全ての保護者様に内容を届けられる場として活用していただければ効果的なのではないかと考え、この度、府中町と海田町の協力を得まして、ネウボラの3歳児健診の会場において「あそびのひろば」を実施したところでございます。

当日の市町のネウボラ職員さんたちの受け止めに御紹介させていただきます。

記述にはしていませんので、口頭で御紹介をさせていただきます。

「家庭にとって大変楽しい催しだったと思います。」「お子さんが健診を頑張った御褒美のように受け取ってもらえて、健診全体の印象がポジティブになったと思います。」「健診途中の待ち時間に体験をするというパターンと、健診後に体験するという二つのパターンの形がありましたけれども、健診途中では保護者の方が健診にいつ呼ばれるのかと集中力が切れてしまうようだったので、健診後の実施が効果的だと感じました。」「体験が今回は一つだけだったために、複数の体験が提供できれば、なおよいと思います。」「家庭教育の中身については、母子保健やネウボラで重視している親子の愛着形成のための対応と重なるところがあるので、ネウボラとしても大変参考になりました。」といった声をいただいております。

ネウボラでは、健診をはじめとして、一回一回の面談の満足度を高めていくことが重要であると考えております。今回の取組は、お子さんの楽しい体験や保護者の方の新たな発見につながる有意義なものであったと受け止めておりまして、今後もこのような取組を継続・発展させていければ良いかと考えております。

私からの報告は以上となります。ありがとうございました。

事務局： それでは、先ほどの取組説明を踏まえて意見交換に移りたいと思いますが、無藤先生に御入室いただくことができましたので、改めて御紹介をさせていただきます。

白梅学園大学名誉教授の無藤 隆 先生です。

無藤委員： よろしくお願ひします。マイクの不良で時間がかかってしまい、申し訳ございません。

事務局： よろしくお願ひいたします。それでは、意見交換に移ります。

ここからは、乳幼児教育支援センターの山内センター長が進行を務めます。

山内センター長： 乳幼児教育支援センター長の山内です。先生方、どうぞよろしくお願ひいたします。

先ほど御説明させていただいた二つのテーマ、①園・所に向けての支援と、②保護者の方に向けての支援、これは両輪だと思っております。この二つの取組を力を入れて進めていますけれども、この取組を進めるに当たっては、本日御参加いただいておりますアドバイザーボードの県内の先生方に、日々いろいろな場面で積極的に御指導・ご支援いただいております。まずは、日々関わっていただいている先生方から、本県の取組についてコメントいただけたらと思います。

最初に、七木田先生から御意見をいただいてもよろしいでしょうか。

七木田委員： 県内のアドバイザーボードの委員として最初に御指名いただいたわけですが、保育所・幼稚園・認定こども園には、度々請われて巡回相談として行くことがございます。併せて、小学校にも度々行くことがあります。そういう視点から、「遊びは学び」という考え方が、どのように園・所等々で理解されているかということについて、2点申し上げたいと思います。

平成30年からというお話がありましたが、そのときから私も関わらせていただいております。随分長い期間でございますが、そこから積み上げてきたことは、幼稚園・保育所・認定こども園等々に伝わってきているというのが私の肌感覚としてはあります。とても効果的に、「遊びは学び」という考え方を広くお伝えできてきているのではないかと考えています。

特に、幼児教育アドバイザーの方々が、現場にこまめに行かれており、いろいろなアドバイスをされている。私も幼稚園・保育所・認定こども園に行くときに、「先日、幼児教育アドバイザーの方が来られました」といったことを何回か聞くことがありますので、非常に小まめに回っておられるなという印象です。私と行く先がかぶるということは、幼稚園や認定こども園等々の中で、外から意見を聞きたいというところは何回も聞くのだろうと思います。逆に言えば、外からのそうした意見を聞きたいと思わない園もやはりあって、そこに向けてどうアプローチしていくかというのが、乳幼児教育支援センター当初からの課題だったように思いますが、そこは今後も課題として残るかと思っています。

もう1点は、乳幼児教育支援センターが開設される時、それは教育委員会に設置されるということでもございました。今でも教育委員会にありますが、例えば、私が小学1年生のクラスを見ながらお話をするとき、小学校の先生の中には、幼稚園・保育所・認定こども園から「遊びは学び」という形で取り組まれた子供たちが1年生にあがってくるということを、どのくらい御存じなのかという、あまり存じ上げていないのではないかと気がしています。何が言いたいかといいますと、せっかく教育委員会の中にある利点は、小学校の義務教育との連携やその上との連携も含めて、教育委員会内での連携ができる場所、また、乳幼児教育・保育はこうした形で進んでいるということ、を小学校等々に伝えていくことかと思っています。もし課題感があるならば、それは今後の課題かなと感じておりました。

もう1点です。保護者との連携については、先ほど御説明がありましたように、啓発

資料等々を「あそびのひろば」などで使われているということでしたけれども、近頃の保護者向けに、せっきく啓発資料がアニメーションのようなイラスト入りでやっているの、動画でも発信し、いつでも見ることができるよう形にしても非常に効果的かと思えました。以上でございます。

山内センター長： 七木田先生、ありがとうございます。

では、続きまして、研修の講師などでもお世話になっております、安田女子短期大学の橋本先生、御意見いただいてもよろしいでしょうか。

橋本委員： まず、1番目のテーマ、「遊びは学び」の考え方に基づいた保育を園・所等に実践していただくための支援について、私も研修させていただきましたが、この「育みシート」をカリキュラムに落とししていくときに、かなりいろいろな知識等がないと細やかに見ていけないという部分があるかと思えます。

乳児のカリキュラムの研修をさせていただいたときに感じましたが、「育みシート」はとってもいいシートだと思います。というのも、乳幼児期に愛着形成が一番大切であると書かれており、それは何よりも体の育ちであるとか、文字の教育であるとか、そういうことではなく、とにかく親子でつながる、先生とつながる、子供同士でつながるといところがきちんと書かれています。先ほど、園で保護者に説明をするといった事例がありましたけれども、子供の発達が少し遅れているのではないかと心配されている保護者に対して、「そうではないですよ」とお伝えするとか、発達に遅れがあるのではないかと漫然とした心配を抱えていらっしゃる保護者に対して、育ちのつながりを「育みシート」を用いて示しながらお話するといったことは、とても説得力があって、「一番大切なところはここだ」ということが前面に押し出されていて、そういう点はとてもいいなと思っています。

ただ、園・所で、カリキュラム、月案に落とし込んでいくときには、もう少しほかの研修が必要で、その一つ一つの支援や援助のところに、もっと「育みシート」に関係する文言を実践に落とし込むようなところまでをイメージしたものが、私自身の反省でもあるのですけれども、そういうところが必要だったと反省しています。

次に、2番目のテーマ、乳幼児期における基本的な考え方を、保護者を中心とした県民に届けるために、県としてどのように取り組むかということです。広島県教育委員会のホームページに掲載されている「あそびのひろば」のページを拝見したところ、「乳幼児期の子供は、遊びの中で様々な体験をしながら成長していくことで、その後の生活や学習の基盤となることばの力や人と関わる力などを学び、身に付けていきます。乳幼児にとって、ふだんの生活の何気ない「遊び」が「学び」そのものです」と、一番最初に書いてありました。これが心にしみ込んでいくような軟らかい言葉で書いてあり、言葉選びにとっても気を遣われたのではないのかなと受け止めました。とてもよいメッセージだと思えました。

中身についても、イベントは全て写真とともに活動内容が掲載されていて、そこでもやはり言葉選びにとっても気を遣っておられる文章がたくさんありました。例えば、「釣りざおの角度を変えてみたり、短く持ってみたりして、釣れるまで真剣な表情で粘り強く取り組む姿に保護者さんもびっくりしていました」といった文面です。どういう姿を求めているのか、例えば、釣れた魚を「見て見て」と誇らしそうに見せる姿に、保護者も「やったね」と一緒になって喜ぶ姿など、広島県や市町の主催者側が、どういう親子像を求めているのかということがよく伝わってくる文章でした。例えば、お兄ちゃんが釣りざおの位置を誘導しながら、下の妹さんが釣り上げて、そこに保護者が入り込み、兄弟と保護者が歓声を上げて家族みんなが喜んでいるといった、そうしたほほ笑ましい姿が具体的に書いてあり、「こうした姿があちこちで見られるのであれば参加してみようかな」とか、「楽しそうだな」とか、「何か新しい親子関係が始まるんじゃないかな」と思っていただけのような、そういう印象を受けました。

そして、「はじめの100か月の育ちビジョン」に書かれているアタッチメントの大切さ、愛着の形成の大切さというものを実現している場面が見えて、大学生のボランティアも入るなど、子供が保護者以外の大人と出会う場として、すばらしい場であるということが発信されており、楽しく「あそびのひろば」について読ませていただきました。そうした場が3歳児健診でも広がっていくとのことで、強く推し進めていただきたいと思います次第です。以上です。

山内センター長： 橋本先生、ありがとうございました。我々の取組をいろいろ見ていただいて、本当にありがたいと思っています。続きまして、先ほど七木田先生から幼保小連携・接続の課題も御指摘いただきましたが、特にふだんから幼保小連携・接続についての御指導をいただいております朝倉先生、コメントをお願いしても良いでしょうか。

朝倉委員： まずは、先ほどの丁寧な御報告も含め、県、各市町、各園・所等、そしてそれぞれの保護者、子供たちが熱心に取り組み、それぞれ大きな成果を上げておられると全体として感じております。もちろん課題や展望もあるわけですが、そのことも含めて少しお話をさせていただきたいと思えます。

①・②とあり、両方関係していると思えますけど、②の方からお話ししていきたいと思えます。いろいろな節目で、園・所等でスライドや動画を使ったり、あるいは口頭で、あるいはリーフレット等を配付したり、「遊びは学び」という考え方や理念を保護者に働きかけておられることと思えます。そして成果も上がっていると思えます。

その中でふだんから感じていることでいいますと、「遊びは学び」というのはもちろん大事ですが、保護者の受け止めからすると、それが小学校以降の教育、学びにどう関係しているのかという視点を持つことが、「本当にこれでいいのだろうか」とか、「これはどういう意味だろうか」ということを考えることにつながっていくのかなと思えます。

そういう意味では、私が関わらせていただいている幼保小連携・接続、あるいは、それ以降のところもセットで保護者に伝えていく、関わっていくということを、働きかけていくことが大事だろうと思えました。県としては、既にいろいろなコンテンツを準備されていますし、いろんな形でアプローチされていますので、それを継続・発展させていくことが大事だろうと思えます。

次に、それに関係して、改めて県のホームページを確認させていただきました。幼児期がどうなのかということや、接続がどうなのかということなど、考え方や事例が、コンテンツとしていいものが上がっており、私も改めて勉強させていただきました。

少し惜しいなと思ったのは、保護者がそのホームページを見て、「面白そう」とか、「ここが大事」とか、進んでいけるようなデザインになるといいのかなと思えました。今のホームページは、私は嫌いではありませんが、硬い感じがしており、保護者のことを考えると、わくわくして、一つ一つの内容に進んでいきたくするような見出しであったり、明るく軟らかくて、機能的なデザインであったりなど、少しリニューアルをしてもいいかと思った次第です。

3点目です。子供主体の保育・教育の実現ということで、園・所を通じて、あるいは、県・市・町が、「「遊びは学び」とはこういうことですよ」とか、「こうやって接続していくんですよ」という考え方や理念を伝えたとしても、保育や教育の現場が実際にそうならないと、それは実現していかない、効果を持たないため、七木田先生もお話しされましたけれども、そこをどうしていくかということだと思えます。

実感として感じておりますのは、ペーパーや動画やオンラインというものは、もちろんツールとして大事ですが、同じように、あるいはそれ以上に、対面であるとか身体性であるとか、リアルな感覚、人間関係などは改めて大事だと思っております。コロナ禍でいろいろな観点からそれが感じられたわけですが、保育研究や授業研究におい

て、コロナ禍のときは、対面でのそうした実践ができなかった時期があったと思います。関わり自体もできなかつたし、そういう研究や研修もできなかつた時期があり、改めてそれが少しずつできるようになっていくと、それがいかに大切であるかということを変更して感じています。そうした園・所内の、あるいは校内の職員研修や、公開の保育研究、教育研究、授業研究、地域での研究など、全国的なものも含め、それらはやはり刺激になるし、非常に効果的だと思いますし、見た瞬間に学ぶところがたくさんあると思います。そうした研修等の開催を是非とも県や市町は応援していただきたいと思います。既にアドバイザーの派遣など、そのほかいろいろな形で応援をしてくださっていますが、引き続きと思います。

あわせて、現場の先生方がしっかり子供たちの未来を考えながら保育・教育に没頭できるような条件整備を引き続きお願いできればと思います。私からは以上です。

山内センター長： ありがとうございます。

ふだんから我々がいろいろな形でお世話になっている3人の先生方から、既に幾つもの課題の御指摘をいただきましてありがとうございます。続きましては、広島県の外から、本県の取組を御覧いただいておりますアドバイザーボードの先生方に順次、御意見をいただければと思います。今井先生、お願いしてよろしいでしょうか。

今井委員： 私は県外の者ですが、広島県とは非常に御縁が深く、県外の間人という感じが全くいたしません。例えば、先ほども御紹介いただきました「あそびのひろば」では、バナーを作ったり、「あかちゃんへ ことばのプレゼント」などの配付資料を、乳幼児教育支援センターができる少し前から、担当の職員の方と一緒に作ったり、という経緯があります。それがまだ使われていて、更に発展して、その当時は「育みシート」はありませんでしたが、その後「育みシート」のような新しい評価指標なども作られるなど、発展しており、感無量という思いでございます。

広島県のコンセプトである、子供主体の学び、「遊びは学び」は、幼児期にとって、最も大事なことだと思います。これを、平成30年、乳幼児教育支援センター創設のときから、ぶれずにずっと守ってくださった広島県、特に教育委員会の方々に、敬意を表してお礼を申し上げたいと思っております。そして、県民の皆さんに、この考えを周知していただくということはとても大事で、この考えが是非もっと広まるように、御努力・御尽力いただきたいなと思っております。

その中で、七木田先生や朝倉先生からも御指摘があったように、社会の多くの方は、「小学校に入るまでの子供時代はそれでいいよね」と、「でも学校に入ったらやっぱり勉強が大事だよ」と思っている保護者がとても多いと思います。そこに、幼児と小学校の義務教育との断絶が生まれてしまうと思うのですが、実は「遊びは学び」のコンセプトというのは、幼児期で終わるわけでは全くないのです。これの重要性というのは、世界的に発達心理学・発達科学の研究者たちがみんな大事だと言っている「プレイフル・ラーニング」の考えと全く一致しており、今ほどそれが国際的に主流になっていなかった、それほど注目を浴びていなかった頃から、広島県でこの「遊びは学び」という考えに基づいて展開していたというのは、とても先見の明があると言っていると思います。その事業に参画させていただいたことを、私自身、非常に誇りに思っているわけでございます。小学校でも「遊びは学び」であるということ、是非、幼保小連携・接続の中で、心から楽しんで遊んで、それが学びになるということが、幼児期だけで終わらないということをもっと社会に発信していく必要があるのかと思っております。

私は、広島県の乳幼児教育支援センターだけではなく、義務教育指導課とも一緒に事業をさせていただきまして、小学生のための、特に低学年の子供のための「たつじんテスト」というものを開発いたしました。このテストは、広島県の外でも、例えば島根県は来年から全県で展開することになっておりますし、気仙沼市など、自治体や市立の学校などでも大きく展開されています。それにより、小学校・中学校での子供のつまずき

の原因が様々に分かってきたのですが、そのつまずきを起こさないための最も大事なところは、幼児期から、言葉と数の概念、言葉に対しての感性、センシティブティーと、数に対してのセンシティブティーのようなもの、量や数について注目して、楽しみながら考えること。数は抽象的で難しい、特に、時間の概念や空間の関係は非常に難しいです。しかしながら、これがクリアできないと、小学校の様々な教科でつまずいてしまいます。算数だけではなく、ほかの様々な教科でもつまずいてしまうわけですが、それをいきなり小学校でやりましょうというのではなく、幼児期にできることがたくさんあるのです。それはもちろん先取りして教えましょうということではなく、日常生活の中で、幾らでも、数について経験しながら、少しずつ抽象化して、時間について考えることに慣れていく、空間の関係について考えることに慣れていく、そうしたことが、小学校での学びにとっても大事な足場かけになります。そういうことも、この「あそびのひろば」などの取組でお伝えいただきたい。私は、幼児期の遊び、特に言葉と数、量、そういうものに関しての遊びは学力に直接影響する、とても大事だということを言って構わないと思っています。学術的なエビデンスもたくさんあります。ですので、そういうことを保護者にも園・所の先生たちにもお伝えくださった上で、この事業を展開して下さると、ますますこの広島県のすばらしい取組が発展する、社会に浸透するのかなと思います。

山内センター長： 今井先生、ありがとうございました。アドバイザーボードの先生方には長年にわたって御指導いただきしており、県内、県外と分けるのはちょっと短絡的でした。本当にずっとお世話になっており、ありがとうございます。

続きまして、先日、東広島市の講演会でもご指導いただきました、内田伸子先生、御意見をいただいてもよろしいでしょうか。

内田委員： すばらしい実績を上げてこられましたことに敬意を表したいと思います。平成30年の頃から私もアドバイザーボードとして、広島県のこれらの取組に及ばずながら協力させていただきうれしく思っております。

まず、1番目のテーマである、「遊びは学び」の考え方に基づいた子供主体の教育・保育を園・所等実践していただくために、県としてどのような支援を行うかですが、これは本当に大事な考え方で、子供主体の教育・保育というものを、広島県では平成30年以前から取り組んでおられました。国では2017年に三法案が改定され、子供主体の教育・保育を実践しようということになりましたけれども、それ以前から「遊びは学び」という考え方を基礎にして、園・所ですっかりと取り組んでほしいということで、特に「育みシート」を作成するに当たっては、いろいろ工夫してこられたわけです。特に、子供の発達の到達度を評価するものではない、あくまでも一人一人の子供の発達の特徴を見て、この子が更に伸びていくためにどのような保育環境や保育の実践をしていったらいいかを振り返るための形成評価のシートである、ということ、徹底して作り上げてこられたかと思います。「育みシート」を使って保育を評価した園・所の先生方から、「子供の育ちについて違った見方があることに気づかされてよかった」といった、一面的な捉え方をしていたもの見方が広がったという感想があったと、先ほど御報告いただきましたが、正にこのアドバイザーボードで検討してきたことがうまく実現されていると思います。このための皆様方の努力は大変なものだったと敬意を表したいと思います。

それから、両輪として、ネウボラの取組などにより、「遊びは学び」という乳幼児期の基本的な考え方を、保護者を中心とした県民に対し届けることができた。「あそびのひろば」などの場で展開しているということも御報告いただきましたが、今井先生も御指摘のように、正にこれから先も続けていただきたい。そして、小学校段階でも「プレイフル・ラーニング」の考え方に基づいて教育課程を考えていくことのきっかけづくりになるような活動へと展開してほしいと思いつつ伺わせていただきました。

この二つの目標を実現するために、これまで地道に丁寧に取り組まれた県教育委員会の皆様方にも、また、県内の先生方にも感謝したいと思っております。

先ほど、「育みシート」をカリキュラムに落とし込んでいくために、もう少し書き込みが必要かもしれないといった御意見があったかと思いますが、私はむしろ、あまり細かく書き込んでしまうと、それにとらわれてしまうのではないかと、ところを少し心配しております。子供一人一人の発達過程や発達状況を踏まえて、全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されることが必要です。子供の生活における発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子供の実態に即して、具体的な狙いや内容を設定することと、具体的な狙いが達成されるよう、子供の生活する姿や発想を大切に、適切な保育環境を構成すると。子供が主体的に活動できるようにすることが保育計画・指導計画においては一番大事な考え方かと思っておりますので、各園で、目の前の子供一人一人を見ながら、その指導計画を自由に柔軟に子供に合わせて変えていく力を持っていただくように、そこを支援することができるとありがたいなと思っております。

保育力の向上のために、県ができることはまだまだあるのではないかと思います。指導計画について、私がこれまで感じてきたこと、考えてきたこととお話しさせていただきました。それから、家庭への支援も、これまでどおり、また小学校段階までも広げていただけるような事業に展開していただけるとありがたいなと思っております。これは、これから先の希望として述べさせていただきました。以上でございます。

山内センター長： 内田先生、ありがとうございました。温かい言葉を頂戴し、うれしく思っております。それでは、無藤先生、コメントをいただいていた方がいいでしょうか。

無藤委員： 「遊びは学び」という考えは、文科省において、広報動画や本も出しているいろいろな広げているところですが、そろそろ「遊びは学び」の考えのもう少し詳しい意味を展開しなければいけないかと思っております。

私が、「遊びは学び」の説明として展開した方がいいと考えることの一つは、「遊び」というのは、特定の何とか遊びに限らないもので、いろいろなところに遊びらしさがあるということです。プレイフルという言い方をすれば、プレイフルネスというのは、いろいろな場面でプレイフルであり得るということが大事だと思います。そうであってこそ、小学校でもプレイフルに意味が出てくると思います。

2点目は、子供たちがいろいろ工夫していくなど、遊びが深まっていくことで、より意味のある学びに変わっていくと思うので、そういう遊びの発展のプロセスをよく見る必要があるということです。

3点目は、遊びがそれだけで完結するのではなく、例えば、砂場であれば砂で遊ぶとして、そこに水を入れたり、容器を使ったり、ごっこ遊びをしたり、いろいろなことが組み合って更に発展するものなので、一つの遊びとして限定するのではなく、一つの遊びがほかの遊びとつながることで意味が深くなるということをおもっています。

4点目は、「遊びは学び」というときに、その更に先として小学校以降があるわけですから、そこにもしかしたらつながるかもしれない芽というものを、子供たちの遊びの中に、保育者が見いだしていくことが常に必要ではないかという気がしています。

また、もっと乳幼児教育支援センターとしての実用的・実務的なことですが、この数年、広島県も含めて、私はいわゆる架け橋プログラムの普及に携わってきました。3年ほど経てかなり広がってきたとは思いますが、そろそろ次の段階だと思っており、三つほど考えていることがあります。

一つは、最後は園・所ごとの検討というものは必要になるので、いかに、研修だけではなく、各園・所の園内研修等の中で具体的に考え、そのための素材を、乳幼児教育支援センターとして提供するかということです。いろいろな提供の仕方があると思っております。

けれど、例えば、様々な動画を提供する。一つだけだと手本のようになりますが、それは手本にするというよりは、いろいろな地域で、いろいろな園での活動の様子が伝わっていただければいいかと思います。

二つ目は、各園・所が孤立してやっていくと、広がらない、続かないという感じが強いので、いかにして幼稚園・保育所・こども園のまとまりをつくっていくかということだと思います。小さい自治体ですと、公立・民間や、幼稚園・保育所・こども園の枠を超えていくまとまりをつくる例も見られます。広島県は規模が大きいいため難しい面はありますがけれども、何とかそういう垣根を超えながら、基本的にはその自治体なり近隣で互いに保育を見合うとか、一緒に勉強するといった組織、ネットワークができると思います。

三つ目に、幼児教育が変わっていく、より良くなっていくためには、小学校側が変わらないとなかなか動かないという両面があるわけです。例えば、幼保の中には、ここ数十年やり方が変わっていないところもありますが、そういうところに聞くと、「小学校がそれを望んでいるからこうするのだ」と言っている。昔の小学校のイメージが強いですけれども、そういう小学校がないわけではないと思います。そういう意味では、小学校側が、特に低学年の教育が変わっているということを幼保に伝えていただくと、「そうした新しい小学校の在り方なら幼保も変えていけるのではないか」と変わっていくような気がしています。全国的に非常にうまくいっているところは、小学校が動いているという感じを持っています。小学校が動くためには、今いらっしゃる教育委員会が動くこと、支えになることだと思うので、非常に乳幼児教育支援センターの働きは期待が大きいところだと思います。以上です。

山内センター長： 無藤先生、ありがとうございました。幾つも多く課題をいただき、また、ありがたいことに、お褒めの言葉もいただいて、我々一同、うれしく思っております。

ここからは、課題を少し絞って話ができればと思いますが、ここで、篠田教育長、コメントをいただいてもよろしいですか、

篠田教育長： 先生方、ありがとうございます。これまでの県教育委員会の取組について、いろいろ御評価をいただくとともに、アドバイスをいただきまして、ありがとうございます。

小学校との接続については、まだまだ課題があるかと思っています。また、せっかく「遊びは学び」ということで幼児期の学びが充実しているので、小学校1年生になったときに、いきなりゼロからのスタートではないところを、いかに、小学校や市町の教育委員会の皆さんに御理解いただくかという点でも、「遊びは学び」の効果を実感いただけるようにするのが大事かとも思っております。

また、ホームページの言及もありましたけれども、保護者の皆様に対しても、小学校での主体的な学びにつながっていることや、あるいは遊びながら体験を通して学んだことが、頭で考えるだけではなく、体感を伴って、しっかり定着できる学びにつながるということや、さらには遊びの中での仲間づくりというところで、小学校以降の集団づくりや仲間づくりにつながっているということや、いかに御理解いただけるように発信していくのがいいのかなと思います。

たまたま年末年始に実家に帰省していたときに、地元紙での高校生の投書が目にとまりました。15歳の高校1年生の子が、「幼少期の遊びが将来に影響するのではないか」といった投書をしていました。投書をしたのは女子生徒で、「私のクラスは理系ですが、女子生徒が少ないのは、私なりに考えたら、幼少期の遊びと関係するのではないか」ということを思いました。男の子はミニカーやブロック、女の子は人形遊びなどが一般的で、そうしたことも含めて、幼少期の遊びにその人の将来を占う鍵があるのではないか。固定観念にとらわれないような幼児期の遊び、そうしたものに可能性があるのではないか」といった内容でした。

「遊びは学び」の効果というものを、いかに発信していけるかということ。園・所で携わっている方々や、子育て中の保護者の方々、そして「遊びは学び」の考え方の下に育った子供たちを受け入れて、指導する小学校の先生方、そうした方々に実感を伴って理解をしていただくためには、まだまだ努力が必要だと思います。「遊びは学び」の良さをいかにして広げていくのか、先生方から、また更に御意見がいただけたらと思っております。よろしく申し上げます。

山内センター長： 篠田教育長、ありがとうございました。

教育長からもありましたが、我々の伝え方の部分、ホームページの話もありましたし、小学校と園・所等のつながりという部分も、まだまだしっかり取り組まなければいけないといった課題について、いろいろな角度から御指摘をいただいております。また、無藤先生が座長として取りまとめをなさった、文科省の「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会」の中でも、教育委員会が、その教育課程も含めて、しっかり中心となって進めるべしといった御意見があったかと思えます。我々がやるべき課題が大きいと改めて身の引き締まる思いがしているところです。ここで、湯崎知事からもコメントいただいてよろしいでしょうか。

湯崎知事： まず、先生方、貴重な御意見・アドバイスをいただきまして心から感謝を申し上げたいと思います。さすが乳幼児教育に携わっておられるだけに、まずお褒めの言葉から入ってくださるという、教育委員会のみんなもうれしくなってやる気が出ているかなという感じがいたします。

本日の二つのテーマの中で、私が特徴的だなと受け止めたのが、多くの先生が、小学校との関係について話をされたことです。これは内容的な面や、小学校が変わると幼保も変わるという面、また、保護者に基本的な考え方を届けるときに、乳幼児の保護者だけをどうしてもターゲットに考えがちですけれども、より広く受け入れられるためには、社会全体にその認知が広がっていくことが重要ではないかということ、先生方のお話をお伺いしながら感じました。正に小学校にも「遊びは学び」という考え方が伝わっていく、定着していく、そして行動も変わっていく。保護者にも、ゼロ歳から6歳までというだけではなく、もう少し先まで、「遊びは学び」がどこまでいくのかということもありますけれども、小学校全体だと12歳までとなると、そこに接する機会も多くなるので、その分、社会的な受入れも拡大するのではないかと考えると、この小学校での取組が、本日のテーマである二つの取組にも非常に効果があるのではないかと感じたところです。

一つ目のテーマについても、ターゲットとしては、具体的に保育所や幼稚園だけを想定してしまうのですけれども、そのためにも小学校まで拡大するということですね。また、二つ目のテーマについても、幼稚園・保育所等の保護者だけではなく、小学校の保護者までを対象とすると、より社会的な認知が高まるということで、正に教育委員会がこれを取り組んでいることがよかったというコメントもいただきましたけれども、これからそうした観点から取り組んではどうかと思いました。以上でございます。

山内センター長： 湯崎知事、ありがとうございました。

本日の話のポイントについて、冒頭に七木田先生から、小学校教育に関して、教育委員会内の連携が不十分ではないかという御指摘もありましたけれども、まずは小学校等々との連携を、どうやってしっかりと形にしていくかということが必要かと思えます。改めて七木田先生、これについて補足等ありますでしょうか。

七木田委員： ほかの先生からも援護射撃でもないですが、同様の御意見をいただいたので、やはり、単独で園・所等の充実だけではなく、それが拡大するという次のステップに行くためには、小学校との課題はあるかと思っていたので、先ほどそう申し上げました次第です。

山内センター長： ありがとうございます。小学校側の変化が園・所等にも影響してくるのではないかと、いろいろ御指摘をいただいております。

一方で、内田先生や橋本先生から、保育者側、園・所側の保育力の充実という点でもしっかり支援する必要があるのではないかと御指摘を頂戴したかと思えます。

橋本先生、補足で何かありましたらコメントをお願いしていいでしょうか。

橋本委員： 内田先生がおっしゃることは私が思っていたことですがけれども、私の言葉が少し足りなくて、先生の誤解を生んでしまったかと思っております。

この「育みシート」はこれでとても良いものであると。ただ、日々の成長というところで落とし込んでいく、一人一人のことをしっかりと見て、習慣形成や健康、人間、環境、言葉、表現といったところに落とし込んでいくときに、先生方のいろいろな見識が問われるといったことを思っていました。

また、最近はいろいろなところで子供主体の保育が行われていて、例えば、男のお子さんが、とてもかっこいいから女の子の主人公をやりたいと。それを受けて、先生方が保護者の方に対して、しっかりと子供の気持ちをお伝えしながら、では衣装はどうするか、この言葉はどう言ったらいいかなどを考えていく。子供がやりたいと思ったことをおおらかにやっていけるような保育を、保護者の方と推し進めていってほしいといった例が、いろいゝろなところで見られてきて、とてもいい保育を展開されているなとうれしく思っていることがたくさんあります。

そのときに、子供が言い出したことを、どれだけ先生のアイデアで支援していくか、援助していくかということが問われていて、何が出てくるか分からないという状況で、保育者のほうがどきどきわくわくするような、そんな保育を、子供と保護者、そして保育者と共に育てていく、そうした保育の現場が展開されるのではないかなと、今、面白い保育が随所に見られていて、今までで本当に一番楽しい時代を迎えているなと思っております。

もう一点、幼稚園・保育所、小学校で、中学校もそうかもしれませんが、ふだんできないような体験を中心にした、体験の遊びというものが、どんなものがあるのかなと、子供が豊かに情操を育てていくために、どんなわんぱくな体験ができるのかなと思えます。例えば、「あそびのひろば」なども、一室という限られたスペースの中でやっていると、どうしても小ぢんまりとした遊びになりやすいのですけれども、一方で、心と体を大きく育てていくような、そうした体験とは一体何だろうか、それがどこに行けばいいのかといったところまでも保障していただくと、園・所とそうした施設との絡み合いもあり、色々なことが広く豊かに広がっていくのかなと思いつながら話を聞いていました。以上です。

山内センター長： 先生の御指摘の点がよく伝わってまいりました。ありがとうございます。

橋本先生からは対面のリアルでの話もしていただきました。この点は朝倉先生からも同じ御指摘を頂戴しており、例えば公開保育など、園・所がいい取組をされているのをじかに見て学ぶという取組を広げていくことが大切ではないかといった御指摘をいただいたかと思えます。朝倉先生、こうしたほかの園・所の形や在り方を学ぶときに、園・所の先生方にどういう視点を持っていただくのが大事であるかといったことなど、何か重要な点があれば教えていただいてもいいでしょうか。

朝倉委員： 大事な点であり、少し難しいところもあるかと思えますけれども、まずは幼保小連携・接続の点から関係してお話をしたいと思えます。この取組が始まってから、一定の年月がたっていますけれども、最初の頃と少しずつ様子が変わってきていて、それは悪いように変わってきたのではなく、大事な部分だと思えますが、最初のうちは、接続の部分で「小学校が困っているので、どうしたらいいですかね」といった感覚もあったかと思えます。それは本質ではなかったわけですし、そういうことではなかったのですけれども、そう受け止められてしまっていた経緯もありました。さらに、「何か新たなことが始まるのでしょうか」とか、「更に何か業務が増えるんですか」といった捉えも一部に

あったように思います。

しかしながら、そういうことではなくて、今日の協議の中で各先生からお話がありましたように、何かが付加わるということではなく、本質的な軸になるところだと思います。だからこそつながっているわけであり、幼児期で終わりということではなく、小学校やそれ以降、もっと言うと、生涯にわたって大事な部分になってくるのだと思います。

そういう点で、最初のうちは、スタートカリキュラムをつくらなくてはいけないとか、そうした受け止めをされる方もおられたのですけれども、そういうことではなく、本質的なことだと、幼児期も大事だけど、小学校でも中学校でも、私たち自身にとっても、安心の中で挑戦する、自己を発揮するということは大事なことですよね、といった言い方でお伝えをしてきました。小学校でいえば、1年生の担任だけではなく、2年生も、そして5年生・6年生の担任も、専科の先生も、学校ぐるみで取り組むという形をつくっていくことが大事であり、それがそれぞれのメリットになり、何より子供たちの成長につながると捉えています。

体験のことでは、最近少し面白いことを感じました。これは今井先生が御専門ですけれども、5歳児に「山ってどういうことかな」と聞いたら、おもちゃが積み上がっているのを指して、「あれが山で、山に上がっていくと、山のとっぺんで景色が見えたり見えなかったりで、山の上で駆けっこして、そこはピクニックするのにちょうどよくて、云々かんぬん」といっぱい語ってくれるわけです。小学校に行くと、「山」を平仮名で書けるか、読めるか、漢字で書けるかどうかのところに注意が行き過ぎて、山というものが持っている、支えている豊かな体験のところ、豊かな関わりができるということから引いてしまっているところがあり、そうではないということが、小学校でも当然大事であり、大事にしないといけないところだと思います。

そういう意味で、話は戻ってこうした研修をどう持つかという点については、幼稚園・保育所・こども園等の中で横の連携を持ちながらというのは、無藤先生が言われたとおりとても大事なところで、あわせて、異校種である小学校も一緒になり、子供の姿を見て、「こう見るのか」、「こういうことと関係するのか」といったことをお互いに学んでいく。体験についても、ただ体験があるのではなく、その遊びとしての体験は、そこから先の探究としての体験に、ほぼプロセスは一緒であり、ベースはそこに十分あるわけですので、お互いが実感できるようなことが大事だと思います。

ですから、園内・校内の研修も、その中に多様な視点が必要であり、それを突破していくには、それを超えた横のつながりとしての研修、さらには校種等の段階を超えた協働の学びというものが展開できていけばいいかと思います。そういう研修会はわくわくするし、発見や驚きに満ちていて楽しいですよね。そうした研修ができればと思います。

山内センター長： ありがとうございます。

わくわくするという話で、先ほど、今井先生から「プレイフル・ラーニング」というコンセプトの話をいただきました。私自身は、こういう考え方を一般に大きく広げられたのは、今井先生の御功績が大きいのではないかとおぼろげに思っています。小学校も含めて、そうしたわくわくするような学びを、幼保と小学校の断絶を乗り越えて進めていく点で、これから考えていかなければいけないポイントだと思います。この点で、今井先生、今後どのように進めていけば良いか、御指導いただいても良いでしょうか。

今井委員： どう進めていったら良いかという点は、きっと教育委員会や現場の方々の方がよく御存じなのかなと思いますけれども、プレイフル・ラーニングの考えは、朝倉先生のお話にもありましたし、ほかの先生のお話にもありましたように、小学校低学年までといった話ではなく、生涯続くものだと思います。

今は全国で、いわゆる不登校、特に中学校や高校でも不登校の生徒さんがとても増え

ています。これはなぜかという、遊びが面白くない、プレイフルではないからですね。型にはまってしまっていて、これをやらなければならない、これを覚えなければならないといった、そうしたものになってしまうと、どんどんプレイフルから外れてしまい、やらなければならない、覚えなければならない義務、何かしなければならないリストができてしまうわけです。そうすると、遊びが学びではなくなってしまう。私は「遊びは学び」であり、「学びは遊び」であるべきだと思っているのですが、遊びが苦痛になって、つらい修行以外の何物でもなくなってしまうわけですね。幼稚園・保育所、それから小学校低学年に限らず、生涯にわたってずっと、遊びは学びであって、学びは遊びであるというコンセプトが大事だと思います。

中学校・高校でも大事ですし、もっと言うと先生方もそうあってほしいと思います。先ほど橋本先生や内田先生がおっしゃったように、子供たちの今の様子に合わせて臨機応変にさっと支援ができる、足場かけができる、そういう先生方になるには、とても熟達が必要です。そうした熟達者になるために、先生方もずっと学んでいかなくては行けない。そのときに、いろいろな面で、これをしなければならぬ、あれをしなければならぬ、しなければならぬリストばかりが蓄積してしまい、自分で何をしたらいいのかという工夫ができなくなってしまうと、プレイフルの逆になってしまうと思います。プレイフルというのは、必ずしも、「ゲームをなさい」、「いつも遊びなさい」という、そういうことではなく、要するに、学んでいる人たちが遊んでいる感覚で楽しいと思える、そこが大事なのです。

そして、熟達者の方は、例外なく、自分のやっていることが楽しくて楽しくてたまらない。それは何もアーティストやアスリートなどの特殊な方だけではなく、現場の先生も全く同じだと思います。子供の成長が目に見えてとれて、子供の学びに支援ができているという感覚を持つことができているならば、初任者の先生でも楽しいと思えるし、もっと工夫しようと思える、そういう全体の環境が大事ですね。だから、幼保に限らず、広島県で提供する学校全て、大学も含めて、そこで関わる人がみんな、生徒も先生も楽しい、遊びが楽しい、もっと工夫したいと、そう思えるような環境づくりを、広島県の行政で是非実現してほしいと思っております。以上です。

山内センター長： ありがとうございます。本質的な御指摘をいただいたと思います。続いて、内田先生、これからの保育者の力量向上に向けての指導について、お言葉をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

内田委員： 橋本先生も言われておられましたが、子供の発話や活動、遊び方、これに敏感になり、「面白いことを考えているな」、「どっちの方向に行くんだろう」というように、それを感じ取り、その遊びが更に展開するよう、環境や言葉かけ、援助を工夫する、それがとても大事な目標になるかと思えます。そのためにも、先ほど今井先生が言われたように、子供の遊びを面白がってみるような目、すばらしいと感じ取るような心、それを保育者自身が養っていくことが大事なのではないかと思えます。学校全て、それから園・所全てで、家庭もそうですけれども、子供も大人も先生も生徒も、遊びが楽しいと思える環境づくり、これを進めていくことが大事ではないかなと。

ですから、保育者自身も楽しみながら保育をし、子供に関わる。成長しつつある、人生の根っこをつくっている、この最中の子供に関わることに喜びが感じられるようにする。そして、いろいろと面白がって子供を見てあげられるような、そうした感覚を育てていけるような、そういう研修ができるといいのではないかと思います。そのためにも、無藤先生も言われましたが、例えば面白い取組をしている動画などを幾つか出して、一つしか出さないと、それがモデルになってしましますが、いろいろな種類の動画を見せることで面白さの感じ方が違うというのを実感してもらえるような、そんな研修も考えていけるといいのではないかと考えております。以上です。

山内センター長： ありがとうございます。しっかりいろいろなバリエーションを出していけるよう頑

張りたいと思います。

最後に、国ではどう取り組んでいくかという方向性を無藤先生から御指導いただきましたけれども、広島県として取り組んでいくときにどういった点に力を入れたらいいのかといったことがありましたら、御指導いただけますでしょうか。

無藤委員： より具体的な点で考えると、乳幼児教育支援センターは広島県にありますけれども、現場との間に各市町がありますよね。さらに、各幼稚園・保育所等々の団体が全県にあります、もっと小さい単位でもあると思います。このように、幼児教育・保育というのはかなり複雑な仕組みになっている。そうすると、小学校などは、県教委の考えというのが伝わりやすいと思いますけれども、幼保の場合には、今申し上げたことに加え、公立・民間の区別もありますので、なかなか各園まで届きにくいというのが最大の問題だと思います。そうすると、県で一生懸命パンフレット等は送るかもしれないけれども、それが活かされるかは各市町の関わりが相当大きい。また、比較的小さい団体も重要かだと思います。つまり、各園の間にあるところへの働きかけを是非していただき、そちらとの協働する関係が大事だと思います。単に、県が大事だと思うから、「ついてこい」ではうまくいかないし、特に、幼保の場合には市町側に監督権限があるので、その辺りをお考えいただくといいかと思っております。

山内センター長： ありがとうございます。いろいろ御意見を頂戴しましたので、一つ一つ大事にさせていただこうと思います。ちょうど無藤先生から、団体との連携・協働が大事だという御指摘をいただきました。本日は、団体の長の先生方にも参加いただいております。各団体の長の皆様からコメントをいただければと思います。

最初に、一般社団法人広島県保育連盟連合会代表理事会長の柄崎先生、お願いしてもよろしいでしょうか。

柄崎委員： お話を伺う中で、昔は民間と公立、幼稚園・保育所、当時はこども園はありませんでしたが、医療分野を担っている保健センターなど、それぞれ文化が違うということで、別な方向を向いて、別な活動をしているところが多かった中、広島県では、全国に先駆けて、こうして「遊びは学び」というキーワードを基に、たくさんの意見を聞きながら、その意見を真摯に取り入れ、より子供が主体的に学ぶように、また保育者の力量が高まるようにという形で運営してくださっていることに感謝を申し上げます。

私たち広島県保育連盟では、乳幼児教育支援センターや広島県と連携し、センターが考えられている方向を周知しながら、また、朝倉先生が言われているように、あくまでも画面越しではなく対面で、体温の感じられる活動を中心に、これからも保育者の力量を高めていきたいと考えております。

本日はたくさんの貴重な御意見いただきましてありがとうございます。

山内センター長： 柄崎先生、ありがとうございます。続きまして、広島県国公立幼稚園・こども園連盟会長の木村先生、コメントをいただいでよろしいでしょうか。

木村委員： 本日は本当にありがとうございます。この会に参加させていただくようになってから、アドバイザリーボードの先生方のお話を聞きながら、私は現場で日々子供と接しておりますので、その子供の姿を振り返りつつ、いつも「そうだな」と思ったり、「ここはどうかできないかな」と思ったりすることが多くありました。

日本全体で子供の数が減少している中で、国公立幼稚園・こども園連盟でも園児数が少なくなってきているという厳しい現状もあるわけですが、一人一人の子供を大事に育てていきたいということは、就学前の園・所等だけではなく、小学校以上の先生方にも共通していることかと日頃から思っております。県の主催されているこの会で、その大事な部分がしっかりと話題になり、それに多くの県外の先生方も参加しておられるという、この貴重な時間を過ごさせていただくということが、大変ありがたいと感謝

の気持ちであります。

私は日々、子供と共におりますので、子供たちの姿を見ていると、先生方がおっしゃるように、遊ぶことが本当に楽しくて、その中でいろいろなことを獲得していると実感しております。それを、そばにいる者、先生たちがセンサーを働かせ、子供と一緒に面白がりながら取り組むことが大事だと、今日も先生方のお話をお聞きしながら改めて実感いたしました。

学びのための遊びではなく、遊んでいること自体が面白い、次はこうしたいと子供の心が動くところをしっかりと捉えていき、初めは難しいかもしれないけれども、「育みシート」を基に、いろいろなキャリアの先生たちが話をしたり、横の垣根を超えて、いろいろな園・所の先生たちと話をしたりということも必要かとも思いました。

国公立こども園・幼稚園連盟では、長い歴史の中で受け継いできた研究や実践がございます。これを継続して発信をしていきたい。公開研究の話も出ましたけれども、公開保育も実施しておりますので、これからも支援をしていただければありがたいと思います。

また、家庭の話では、若いお母さんたちからの悩みを聞くこともありますけれども、それなりに工夫しておられる中で、ここから先どうなっていくのかと1人で不安を抱えておられる方もいらっしゃる。未就園児の広場や、今日お話にありました「あそびのひろば」などで、我が子が楽しそうに遊ぶ、兄弟で遊ぶといった姿を見られる場があることも、保護者の方には力になるかとも思いました。そちらも引き続き支援をしていただければと思います。

山内センター長： 木村先生、ありがとうございました。最後に、公益財団法人広島県私立幼稚園連盟理事長の山中先生、お願いしてもよろしいでしょうか。

山中委員： 本日は貴重な御意見を賜りまして、ありがとうございます。

広島県私立幼稚園連盟においても、幼保連携という形で保育所を併設されているところや、幼稚園型で保育所と同じような機能を持たれているところなど、様々な種類の園が存在します。その中で、遊びは学びの大切さということを研修大会でも訴えています。子供たちの主体性という大切なところ、そして園でも先生たちが楽しく保育をする。教育実習の学生さんが来られたら、「うちの園の先生たちも楽しく頑張ろう」と、「楽しいことが実習には一番大事だ」とよく話をするのですが、では、実際に子供たちの新たな発見や心の成長などを見ていく中で、学ぶ力がどのように備わっていったのだろうかといったことの検証が本当にできているのかということも、現場の先生方にもっと入り込んでいただき、検証していきたいとも思っております。そして、それが私立幼稚園連盟の研修の中にも生かしていければと思っております。

また、幼稚園でも乳幼児の保護者の方と一緒に通園していただくという制度を設けています。そこで乳幼児教育支援センターがつけられている「遊びは学び」のリーフレットをお配りするなどし、幼稚園や認定こども園の中で、子供たちはこういった形で遊びの中から成長を遂げてきているといったことも話をしています。また、参観日などで、保護者の方の子育ての不安がなくなるよう、「幼稚園の生活はこうですよ」ということをお話しさせてもらったり、「育みシート」も担任が使いながら、担任自身が主観で話していたことが、もっと客観的に冷静に、「成長ってこうなんだ、発達ってこうなんだ」ということを家庭の方にお話しさせてもらったりすることで、園も家庭も一緒に喜びを分かち合うということも、学ばせてもらっているのではないかと思っております。

子育てに不安になることで少子化が進んでいくという、本当に悲しいお話がありますが、こうして取り組んでいかれる中で、少子化につながらず、「もう一人子供が欲しいね」といった明るい社会に発展していければとも思っております。これからも御指導よろしく願いいたします。

山内センター長： ありがとうございます。本日は、アドバイザーボードの先生方、団体の長の皆様方、本当にありがとうございました。頂戴しました御意見を踏まえ、しっかり関係各所と連携し、施策の充実に努めてまいります。それでは、司会に返します。

事務局： それでは、本日の会議を閉会いたします。

閉会に当たりまして、重森乳幼児教育・生涯学習担当部長（兼）参与から御挨拶を申し上げます。

重森乳幼児教育・生涯学習担当部長（兼）参与： 皆様、こんにちは。乳幼児教育を担当している部長の重森でございます。

この度、こうして公開という形でアドバイザーボードを行いましたところ、沖縄県から秋田県まで130名を超える関係の皆様にご参加をいただきまして、本当にありがとうございました。本県の取組や有識者の先生方の話などをお聞きいただいて、いかがだったでしょうか。

また、アドバイザーボードの先生方におかれましては、大変お忙しい中、本日の会議にご参加いただくとともに、多くの御示唆をいただきましたこと、改めて感謝を申し上げます。先生方には、これまで長きにわたり、本県の施策へ御支援をいただいております。本日は、試行錯誤して悩みながら進めてきた本県の取組に対しまして、過大な評価をいただき、乳幼児教育支援センターのメンバーも元気をいただいたかなと思います。

これから県として取り組むべき視点についても、たくさんのヒントをいただきました。私個人としては、先ほど知事も篠田教育長も言っておりましたけれども、「遊びは学び」のコンセプトが小学校以降にどうつながるか、幼稚園で終わるのではないということをもっと先生方や保護者の皆さんにしっかりと伝えていきたいと思っておりました。こうしたことが伝わっていくことにより、県民みんなでここを大事にしていきたいという意識になっていくのではないかと考えております。

本日いただいた御助言・御意見を基に、教育委員会では小学校を所管する義務教育も担当しておりますので、そちらとの連携、また、県全体で、ネウボラなどもしっかり連携を進めながら、乳幼児教育支援センターとして本県の施策を進めてまいりたいと思っております。また、本日御参加いただきました各連盟や協会の代表の皆様方ともしっかりとタッグを組み、更に有効な施策を展開してまいりたいと思っております。

改めまして、本日御参加いただきました皆様、本当にありがとうございました。引き続き、御指導・御協力をお願いいたしまして、閉会の御挨拶とさせていただきます。

事務局： 委員の皆様方におかれましては、熱心に御議論いただきまして本当にありがとうございました。最後に、御視聴いただきました皆様におかれましては、アンケートの回答への御協力をお願いいたします。チャットにアンケートのリンク先も貼っております。また、県教育委員会ホームページからもお答えいただけるようにしておりますので、いずれかから回答への御協力をお願いいたします。

以上をもちまして、「令和6年度広島県公開アドバイザーボード」を終了いたします。